

職業としての小説家 村上春樹

【この本について】

自分が小説を書くことについて、こうして小説家として小説を書き続ける状況について、まとめて何かを語っておきたいという気持ちが前からあった。この文章は、最初から自発的に自分自身のために書き始めた文章である。



特に第1回から第7回に関しては、内在的な部分に触れて書かれており、建築に通ずる考え方もあるのではないかと感じた。

第1回 小説家は寛容な人種なのか 【小説を書くこと、小説家について】

小説なんて誰でも書けるため新規参入者も多く間口も広い業態であるが、一番難しいことは「リングの上に長く留まり続けること」である。これには一種の「資格」のようなものが伴う。そして小説を書くことはローギアで行われる鈍臭い作業であり、効率の悪さから頭の回転が速い（賢い）人は早々に見切りをつけて長く留まることは殆どない。つまり小説を書くことはたとえばを繰り返す作業であり、**小説家とは不必要なところをあえて必要とする人種である。**



第2回 小説家になった頃 【小説を書くまでの道のりと自身のスタイル】

結婚→（入学）仕事→大学卒業という一般的な手順とは逆の人生を歩んだ。学生運動に少し参加していたが、過激になり人が死んだことで大きな失望を抱えた。この経験から**言葉には力があり、その力は正しく公正である必要がある**と考える。そして野球の試合を見ている時、天啓（epiphany）のような感覚から自分にも小説が書けるかもしれないと感じ、半年かけて『風の歌を聴け』を書いたが面白くなくがっかりした。そこで**英文タイプライターで一度作成した文章をもう一度日本語に翻訳してみると自分なりの文章リズムが掴めるようになった**。こうして小説家への一歩を踏み出した村上が、今でも大事にしているのは小説を書く**チャンスを与えられた**という率直な認識である。

第3回 文学賞について 【作家にとって最も大切なもの】

文学賞には興味がなく、大事なのは良き読者である。審査員を頼まれることもあるが個人主義的な性格から断ってきただけでなく、作家にとって何より大事な責務は**少しでも質の高い作品を書き続け読者に提供すること**である。つまり作家にとっていちばん大切なことは**個人の資格であり、賞はあくまでも補足的なもので作家の価値を決める結論**ではない。

第4回 オリジナリティーについて 【オリジナルの見つけ方】

- ・村上が考える、表現者として「オリジナルである」ための3つの条件
- (1) 他の表現者とは明らかに異なる、独自のスタイル（サウンド、文体、色彩）を有している。**ちょっと見ればその人の表現だと瞬時に理解**できなくてはならない。
- (2) そのスタイルを、自らの力でバージョンアップできなくてはならない。時間の経過と共にそのスタイルは成長していく。いつまでも同じ場所にとどまっていることはできない。そういう**自発的・内在的な自己革新力**を有している。
- (3) その独自のスタイルは**時間の経過と共にスタンダード化**し、価値判断基準の一部として取り込まれていなくてはならない。あるいは後世の表現者の豊かな引用源とならなくてはならない。

→(2)、(3)に関しては、ある程度の「時間経過」が必要としている。村上自身の体験として、オリジナルの文体なり話法を見つけ出すには、まず出発点として「自分から何をマイナスしていくか」という作業が必要とされる。何が必要で何が不必要かを見極める基準としては**それをしているとき自分が楽しい気持ちになれるかどうかである**。

第5回 さて、何を書けばいいのか？ 【小説家としての素質】

- ・小説家になるために大事なこと
- ①本をたくさん読む
- ②マテリアルをできるだけありのまま受け入れ蓄積する

原料をたくさん溜め込める「余地」を自分の中でたくさんこしらえておく。このとき具体的細部（建築で言うディテール）のコレクションが重宝される。もし小説家になりたいなら**注意深く周りを見回すこと**が重要で、世界はつまらなさそうに見えて実は多くの**魅力的な謎めいた原石**に満ちている。小説家とはそれを見出す目を持ち合わせた人々のこと。

★第6回 時間を味方につける 【長編小説を書くことについて】

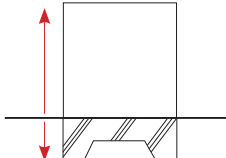
長編小説こそが生命線であり、短編小説や中編小説は極言すれば長編を書くための大事な練習である。長編を書くときはそれ以外何もやらないし、1日に400字原稿10枚は書くことをルールとしている→**長い仕事をするときは規則性が大切な意味を持っている**。

客観的に指摘されるものは何か問題を含んでおり、批評、助言はできるだけ虚心に謙虚に拾い上げるべき。長い仕事では、ある程度正気を失っているという自覚が必要で、正気な人間の意見は概ね大切。**そして「時間」は作品を作り出していく上で非常に大切な要素であり、時間を味方につけるにはある程度自分の意志で時間をコントロールできるようにならなければいけない**。

小説を書くときのプロセス
i 第1、2原稿は時間をおいて書き直す
ii 半月から一月以上の長い休みを取る
iii 第3者の意見を取り入れる

★第7回 どこまでも個人的でフィジカルな営み 【健全なる精神は健全なる身体に宿る】

必要なのは持続力であり、これには基礎体力が必要であるため毎日ランニングをしている。そして、物語るとは意識の下部に自らが潜っていくこと。**大きなもの物語ほど、より深く暗いところへ潜る**。この深い闇の力に対抗するためにはフィジカルの強さが必要となる。→つまり心はなるべく強靱でなくてはならないし、長い期間に渡って心の強靱さを維持するためには、その容れ物である体力を増強し、管理維持することが重要。



建築も大きくなるほど、大きな基礎が必要になる。

第8回 学校について 【効率は想像力の対極にある】

学校は好きではなかった。教育の根底にある日本の社会システムの数値重視の硬直性と機械暗記的な即効性・功利性志向が弊害を生んでいる。そしてシステムに囚われた閉塞的な場によって逃げ場が不足していることが、いじめ問題や原発問題に繋がっている。

第9回 どんな人物を登場させようか？ 【小説の楽しさ】

小説の登場人物にモデルとなっている人おらず、ほとんどは頭の中で勝手にこしらえた架空のキャラクター。登場人物が増えてきたため、『ノルウェイの森』では名前付けを行ったことで小説が三人称となり、名前があることで物語の可能性が増えた。また若い人ばかりを主人公にすることを「なぜ自分と同じ年代の人を主人公にしないのか」と言われる。小説の楽しいところは**なろうと思えば誰にでもなれるところ**。その楽しみをあえて手放すようなことをする必要はないし、実際に自分を客観的に見つめて物語を書くということはかなり難しい。



第10回 誰のために書くのか？ 【自分のために書く】

「風の歌を聴け」の中に、デレク・ハートフィールドという架空の作家が登場し、その作品の一つに「気分が良くて何が悪い？（What's Wrong About Feeling Good?）」というタイトルの小説が登場するが、これが当時の村上の考え方であった。「羊をめぐる物語」で「気持ちよさ」を失うことなく小説自体を深いものにしていきたいと考えた。そこで店を売払い、小説だけにのめり込める環境を作り、読者の存在を念頭に置くようになった。しかし、結局のところ何をどう書いたってどこかで悪口を言われる。リック・ネルソンは「ガーデン・パーティー」という歌で“もし全員を楽しませられないなら、自分で楽しむしかないじゃないか”と歌っている。現在はどうせ小説を書くなら**自分が楽しめる小説**を書いている。

第11回 海外へ出ていく。新しいフロンティア 【挑戦することの大切さ】

海外でも自分の足でマーケットを開拓するようになる。

- ・日本はバブルで浮かれ、飽和状態にあり、自分の可能性を試せるような場所ではなかった。
- ・日本での風当たりが強かったため、なら海外で結果を残して見返してやろうと言う気持ちがあった。

→そしてこの挑戦は功をなして、NYをハブとしてヨーロッパにもマーケットを広げる。**何歳になろうと自分の可能性の「余地」を信じて、目標を掲げ行動することは素晴らしことだとしている**。

第12回 物語のあるところ・河合隼雄先生の思い出

村上が唯一心が通じ合ったと感じている、河合さんとの思い出話。

